

0 0 0 0 0

電 3 0 0 3 - 5 5 5 5 5

5

が期待される。5月27日(日)7時開演。一人￥23、

樂院を卒業した後、ゲルハ

ルト・ヒュッシュ氏等に師

事。第5回日伊コンクール

に入賞、各国で幅広く活動

を続けている。今回の曲

目は『マイウェイ』『時計

など。情熱の籠ったショー

が期待される。

5月27日

(日)7時開演。一人￥23、

松本幸三氏

愛を唄う

イタリア、中国など国際的に活躍しているテノール歌手、松本幸三がコンパクトディスク製作記念を祝いホテルゴーフルリツツでディナーショーを公演する。氏はミラノ・ヴェルディ音



森本 泰好氏

391-4024㈹

島隆氏より田淵栄次氏へバトンタッチされた。専務取締役には森本泰好氏が留任。百店会の仲間も多く入っている『さんかか』がこれからどのように変化していくか注目される。



田淵 栄次氏

新しくなった神戸地下街3月28日に神戸地下街株式会社代表取締役社長が長

CONCERT

★松本幸三

イタリア、中国など国際

的に行きたい

トディスク製作記念を祝い

ホテルゴーフルリツツでデ

ィナーショーを公演する。

氏はミラノ・ヴェルディ音

SPECIAL MESSAGE

神戸百店会だより



NEWS

★

新しくなった神戸地下街

3月28日に神戸地下街株

式会社代表取締役社長が長

嶋から名揮者ザハール・

ゲーロフもそんな注目を集

めている神童のひとり。5

歳から名揮者ザハール・

ゲーロフもそんな注目を集

めている神童のひとり。5

歳から名揮者ザハール・

ゲーロフもそんな注目を集

めている神童のひとり。5

歳から名揮者ザハール・

ゲーロフもそんな注目を集

めている神童のひとり。5

歳から名揮者ザハール・

ゲーロフもそんな注目を集

めている神童のひとり。5

RECITAL

★魅惑の音

レーベン、キーン、五

鶴みどりなど、クラシック

界に力強い新風が吹いてい

るが、85年にウニニアウス

キー国際コンクールで優勝

したソ連のマキシム・ベン

ゲーロフもそんな注目を集

めている神童のひとり。5

歳から名揮者ザハール・

ゲーロフもそんな注目を集

めている神童のひとり。5

CONCERT

★山下洋輔・鈴木一郎

ジョイントコンサート

5月29日にボートピアホ

テルでジャズ・ピアニスト山

下洋輔とギタリスト鈴木一

郎のジョイントコンサート

が開催される。時でピアノ

の鍵盤を打つ独特の奏法を

持つ山下洋輔は、欧米でも

人気がある。鈴木一郎もカ

ーネギーホールで演奏する

など、国際的な活躍をして

いる。2人の個性がどのよ

うにぶつかり合うか注目し

たい。会場はボートピアホ

テル本館・借楽の間で7時

30分~/9時。



山下 洋輔

5月26日(土)7時開演。当
日券￥3,500(当日座席
引換)於田崎ホーリ(ボート
ライナー市民広場駅下車)
06-341-0547

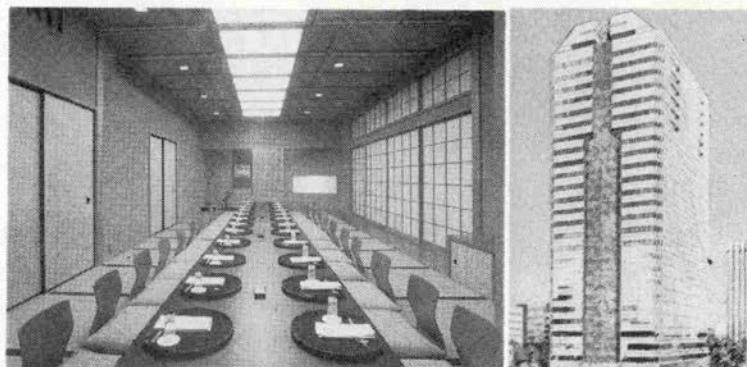


マキシム・ベンゲーロフ

PEOPLE <77>



●伝統ある中にも新しさが
丸山 和美さん／**ワイン**セラリスト



OPEN

★東京紀尾井町に花隈の 料亭「松酒家」が開店

大正6年に創業された
花隈の料亭「松酒家」の
紀尾井町店が昨年12月に
オープンした。超近代的
なビルの一隅の純日本風

の店が眼を魅きつける。

瀬戸内の新鮮な魚介、
最高級神戸牛など、厳選
された素材を使用し、渾身の
技から生れる逸品の
数々は、幾多の美食家た
ちをうならせることは必
至。4~30名用の個室が
用意されており、大切な
方のおもてなしに最適。
またバーもあり、ゆつた
くつろげるのも嬉しい。

● 東京都千代田区紀尾井町3-12
1F
03-2301-8790



TOPICS

●ポートビアホテル
スペシャルイベント
カリフォルニアから人気シ
エフ、「ジョン・アッシュ」を
招き、「ワイン」と料理を味わ
う」というイベントが4月
27日から10日間開催された。4月
フランスで料理とワインの知
識を得た氏は、自然の素
材を大切にした独特のスタイル
で、カリフォルニアで広く
その名を知られている。生花
を用いたり、カリフォルニア
ナッフをソースに使ったりと
ヘルシーな味が特徴。¥2,000
500円~¥8,000のコス
トがある。

■

ポートビアホテル

南館

4F

テラス

レストラン

レヴァン

テ

302-1111

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

・淀川長治
映画評論家



ことしのアカデミー作品賞

『ドライビング・ミス・デイジー』

これがアカデミー作品賞をとったのは、まだしも「七月四日に生れて」でなかつたことでホッとした。「七月四日に生れて」のオリバー・ストーン監督は商算がむき出しで下品だった。しかしこの監督がアカデミーの監督賞をとつたのは、今や盛り上つたこの監督の勢いにオスカーモードをあげたのである。

さて「ドライビング・ミス・デイジー」が作品賞を取つたのもやや意外。私には「フィールド・オブ・ドリームス」のほうがはるかに出来は立派と思えたのに。けれども「ドライビング……」が作品賞をとつたことと、私はアメリカが今しきりに善良に戻ろうとしていることを感じとつた。この「ドライビング……」は、誰だつて初めからラスト・シーンが想像できるストーリーだ。しかも南部のアトランタ一九四八年から二十五年間の老女と黒人運転手の話。初めこの黒人を嫌つた老女がその二十五年間に黒人と「こころ」の友となるまでのヒューマン・ストーリー。もう初めつから結果のわかつた映画なのだ。最もモダーンな新しい感覚のヒューマン・ストーリーの「フィールド・オブ・ドリームス」、これはいつたい何のことかわからぬうちに胸にせまるあたりのタイプのヒューマン・ストーリーなのに、これを蹴つて「ドライビング……」に作品賞が行つたのは何ごとかと思ふ。

考えると今アメリカ映画はもう一度戦前のあのアメリカの美しい映画、その時代を取り戻そうとしているかに見えた。思えばレオ・マッケリイ監督の「明日は来らず」(一九三七)や「我が道を行く」(一九四四)あたりに戻りたがつているように思え、単純にわかり、単純に涙し、しかしやがてじっくりと考えてくるとしみじみとわかつてくるような映画をアメリカ映画があ

けれども「ドライビング……」はいかにもわかりいい。しかも黒人ぎらいの土地だった南部アトランタで、思ふ。

すなおに、型にはまつたストーリー



らためて誉めだしたというのであろうか。じつさい「我が道を往く」をよかつたよかつたと言つたのころ、日本に上陸したアメリカ兵の顔はいかにも善良だった。ところが、このごろの車の追っかけ、ガン・プレイの恐怖、それらのアクション映画を楽しむアメリカ人あるいは日本人の顔にはやさしさがない。アメリカがオスカー像を「ディジー……」に与えたのも「アメリカよ目をさせ……」かも知れまい。



母（ジェシカ・タンディ）は、息子のプレゼントが気に入らなかった。

5月12日より神戸新聞会館シネマⅠにて上映。

しかしまたこれがオスカーを取つたのは、主役のジェシカ・タンディゆえでもあろう。舞台の折り女優で「慾望」という名の電車のあの主役のブランシユも演じたことがある。映画では「鳥」に出たり「コクーン」には夫のヒューム・クローニンとも出てはいるが、まともにデンとおさまった主役はこれが初めてで、これがまた

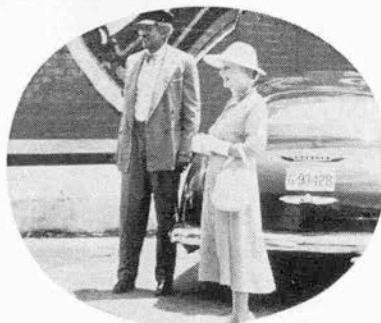
像を「ディジー……」に与えたのも「アメリカよ目をさせ……」かも知れまい。

オスカー賞をもたらしたか。オスカーは「ディジー……」に作品・主演女優・脚色・メイクと華やかに受賞をなべたが、マイクこれはこの老女を九十七歳という年にしたことで賞を取つたのであろう。ほんとうはジェシカ・タンディは八十一歳だよ。

×

かいつまんでストーリーを話すと老女はやもめで息子

は町のさる会社の社長。



この母たる老女はユダヤ人で、しっかりとものでケチ。ところが事故をおこし、もう老女の運転ではあぶないと息子（ダン・エイクロイド）が少し上等な車をプレゼントした。しかも黒人の運転手（モーガン・フリーマン）つきで、これがシマツ屋の母には気に入らなかつた。とくに黒人運転手つきがいかにも気に入らなかつた。自分はまだ運転ができるというわけでこの老女は黒人を、ときにはきびしく、ときに皮肉にいじめるのだが、世の中のことを知りすぎた苦労人肌の黒人運転手はやわらかくこの老女にしたがつて、老女の本当のフレンドになつてゆく。ジェシカはもちろんが息子役のコメディ型だったダン・エイクロイドが舞台的演技ながら実に巧い。もともとこれはブロードウェイで四年間ロングランのヒットをとつた芝居の映画化だ。さて共演のモーガン・フリーマンは舞台あがりの実に巧い黒人俳優だが、ここではさとりすぎた演技でもって、ジェシカを食わぬひかれめ。これが助演男優賞を「グローリー」の黒人俳優デンゼル・ワシントンにゆずるはめになつたのか。とにかくサラリとしたモーガンの演技も捨てがたい。監督は、ブルース・ベレスフォード。

る賞。

今回の受賞作と受賞理由は次の通り。

ポケツト ジャーナル



シラカワレジデンス（異人館の保存・敷際処理）、スティライフ三宮ビル（敷地処理）、神戸伊藤町今西テラ三宮（夜景の演出）、シテラ三宮（夜景の演出）、

★神戸の玄関口華麗に変身
JR三ノ宮駅が改修へ
神戸の表玄関とも言える
華麗な変身を遂げる。
JR三ノ宮駅が、2年後に



生まれ変わるJR三ノ宮駅

ハイセンスな駅「情報と文化のキーステーション」とする等の整備がなされる。
使用開始予定は1992年4月。

★太陽神戸三井銀行が
いよいよスタート

昨年8月29日の合併構想発表以来、注目を集めている太陽神戸三井銀行が4月1日に正式発足した。新銀行の本店は東京となるが、浪花町にある旧太陽神戸銀行の本店ビルは神戸本部となる。

1937年の高架化以来、大きな改修も行っておらず、雑然とした店舗配置や乗車口と降車口が異なる中央口と東口といった具合に、ターミナル駅としては設備も不充分な同駅。

今回の改修では、(1)改札口を中心部分に集約。(2)旅行センターを中心コンコースに移転。(3)駅東側を家族の旅の想い出を演出するゾーンと配置。(4)駅全体のイメージを「歴史と共生する

★神戸の景観形成に一役
第4回神戸景観・ボイン

ト賞の受賞者が決まり、3月23日に表彰式が行われた

同賞は神戸の景観形成に寄与したと思われる建築行

為の中、特にその場所にふさわしいポイントに配

慮されているものを表彰す

★国際的視野からの
街づくりを目指して

テマはアーバンデザイン

——全国景観会議ひよ

うご'90」が5月30・31日の

両日、神戸国際会議場メイ

ンホールで開催される。

青春の想い出

昨年9月に開かれたフェスティバル大会に、私は通訳として参加しました。いろいろな障害のある選手たち。目の見えない人、手足の悪い人、下半身がなくてスケートボードに乗って移動している人。障害は違うですが、障害人に負けずに一生懸命に生きている姿は共通しています。私が友達になった人は、義足で100メートルを12秒で走り、金メダルを貰いました。私はこれらの競技を見ていて、驚きと感動の連続でした。ちょっとした事ですぐ挫折する自分が情けなくて、胸がしめつけられる思いました。



今西ビル

誕生日ありがとう運動



——全国景観会議ひようご'90」が5月30・31日の両日、神戸国際会議場メイ

ンホールで開催される。

——S学園高校学園手帖から

感動を忘れた世代といわれる彼女に、感動を与えたものは?

誕生日ありがとうございました。

ぜひ参加したいと思っていました。

またこのよう機会があつたら

ぜひ参加したいと思っていました。

——S学園高校学園手帖から

アメニティ豊かな住環境を創造し、世界に誇れる美しい街づくりを進めるための国際的視野からの技術や情報の交流を図るための会議となる。

の製作販売。③ケーキ・バー
ティースペースを設置しケー
キの試食。④毎日12時と3
時に民俗婚礼衣装の花嫁に
よる祝い菓子のサービス等。

ヤツチフレーズとしても使用していく。

図書ガイド



洋菓子は勿れ袖百アホ

レクターで「洋菓子天国KOBÉ」の著者である村上和子さん。

内容は①名匠30名による工芸菓子の作品展示。②ミニショップを展開しケーキ

5月3日～8日に丸大丸神戸店で「第3回味の名匠—OBE展」が開催される。監修はサンテレビのディ

講演は映像作家の吉田直哉氏、フランスの建築家ボーラー・アンドリュー氏の両名。また如月小春さん、幸田シャーミンさん、残間里江子さんといったユニークなバネリストを集めてのセッションも行われる。
■問い合わせ・国際景観会議ひょうご'90事務局 電361-1975

The logo features the word "KISS" in a large, stylized, hand-drawn font. A large checkmark is drawn over the top left of the letter "K". To the right of "KISS" is a circular logo containing the letters "FM". Below the main text and logo is the slogan "88.9 JOIN-FM".

A black and white photograph of a young woman with dark hair, smiling broadly. She is holding a rectangular certificate or diploma in front of her chest with both hands. The certificate has some printed text on it, though the details are not clearly legible. The background is slightly blurred, showing what appears to be foliage or trees.

*FMキッスをヨロシクと広報の布施さん

局とリストナードとの親密な関係を表現している、女性のかわいい色気を感じさせる——などの理由でこの名称が採用され、今後は局のき

10月1日に開局を控えて
いる兵庫FMラジオ放送
(上島達司社長・本社神戸)
の局の愛称が“エフエム・
キッス”に決まった。

戸ハイカラ文化の代表とも言える洋菓子文化の真髓に触れる絶好の機会である。★ステーションネームは
FM Kiss'

イヤモンドスクエア（田崎ジユエリービル内）にて。

EVOC主催による語学講習会の紹介でしたが、続いて同団体では留学生を対象としたバザーを行う。

5月27日午前11時から、ポートアイランの田崎ダ

★バザーへの誘い
先月号の本欄で、神戸南
区にて主催による書道教室開
催の件を記載した。この件は、アーティストとしての活動の一環であ
る。アーティストとしての活動の一環である。アーティストとしての活動の一環である。

スナリスナーの合成語)をターゲットに、神戸らしい高感度ステーションをクリエートしていく。

TPOに合わせた音楽情報の編成をコンセプトに、



野倉 健司

野倉 健司 楽がき

が満期になつたような気がして」
退社するといつた、人生そのもの
を窮屈に見感じるが、ユーモラス
で新鮮に見じらる。布袋の転がつ
て寝酒をチビチビやるサラリーマン
に是非お推めしたい。

サラリーマン・定年前後

お聖さん。自分が得意のフレット構造を見とて世を渡るOしたちの言動が、時折り可愛い子ブリッ子したり、ちょっとした語り口に嫌味がないかんとしたくもあ。あっけらかんとしたくもあ。

夢のやうに
日々過ぎて
田辺 聖子

図
書
ガ
イ
ド



心の風景

名精神科医

高橋 孟 ▲マンガと文▼

〈8〉



株式会社 オータニ徳風社
大谷昌代 漫画家

"bring Ceremony"	
全国葬祭事業協同組合	
神戸市葬祭事業協同組合理事	
本社 / 神戸市長田区松野通1-11-12	078-621-0089
鈴蘭台支店 / 078-592-15485	

今年89歳になる寝たつきの老婆が、ある日突然歩きだして、介護に疲れはてていた娘を驚かせたという。娘というのは、私の仲間の女性マンガ家で「ほんとにマンガのような話なの！」と声を弾ませている。

ある日「絵でも描いたら……」と、買ってきたスケッチブックとクレヨンを何げなく置いたら、お母さんが飛びついてきたのだそうだ。世の中には不思議なこともあるものだ。と、聞いた私も驚いた。ボケていたはずのお母さんが「急に眼が輝いてきたのよ！」という。それからといふものは、毎日のように、近くの公園に出かけてはスケッチをはじめ、見物人にほめられて生き生きしているそうだ。「それがまた上手なの……」と二度ビックリしている。

お母さんは、その昔文学少女だったらしいから、今まででは原稿用紙をあたえてあつたらしい。ほんとは、絵が描きたかったのかかもしれない。医学的にどう説明できるか知らないが、潜在能力を引き出させた彼女のアイデアに感服するばかりだ。彼女が精神科医なら「名医」というべきだろう。

後日、酒友の医者に話したら「医学書にないものが人体を左右することがある」そうで「生かすも殺すも医者の言葉次第ということもある」のだそだ。そこで、つくづく、私がボケたら娘が「何をあたえてくれるだろうか……？」と思うのである。

第11回

るぼるたーじゅ神戸



有井 基

—Hazime Arii—

カメラ・池田 年夫

たつた一つの靴

だれが名づけたのか「魔法の靴」が、評判を呼んでいる。クリエーターの寺前利教さんにいわせば、魔法でも何でもないのだが、靴に対する意識革命へ、起爆効果をもたらせたことは確かだろう。

いつだったか、酒の席で

「おたくの靴、作つたげるわ」

いわれるまま同じ年の気安さもあって、紙の上に立つと、ボールペンで足型をなぞられた。しばらくして、グリーンの皮靴が届いた。はいてみると、靴をはいたという感覚はない。阿波踊りの足袋はだしさながらである。舞い踊る気分のはずみで、座敷を歩き回った。小学校の遠足前夜、新しい運動靴をはいて行つたり来たりしたようだ。

だから、PRにならないよう、ありのままを紹介したいと思った。しかし、神戸市長田区丸藻通六丁目七ノ一大神産業を訪ねて、なまじつかなPRは、かえつて寺前さんに迷惑をかけることに気づかされた。全国からの注文、要望に応じかねる状態を、この目で見たからである。

もともとが皮革材料と靴の中底の卸業者だった。今も、牛皮が作業所、倉庫に、天井まで積み上げられている。その「本職」をほっぽり出して?「ラ・クーツ(楽なクツ)」に打ち込むきっかけは、レザー・クラフト(皮

革工芸)の教室を開いた四、五年前だったろうか。

「財布や小物を作っていた生徒さんが、靴も手づくりでやれないか、というんで、私も趣味やから考えたんです。一枚の皮で一足作るところまで、丸二年は試行錯誤

の毎日でしたねえ」

まず中底を中心に、両翼の甲皮を折り合わせてステッチをつくるだけで、だれでも手作り可能なところへ到達した。靴の手作りなど考えられないという「常識」を、まず破って、世界でただ一足の「自分の靴」を送り出しに作つてもらうようにしたんです」

「お客様の足のサイズを測つて、それを一枚の皮から裁断し、靴底、ロウ引きの麻糸、縫い糸、接着剤、靴型などをキット(材料ひとそろえ)にして、説明書通りに作つてもらおうようにしたんです」

今でこそ、こととなげに語るが、当時の苦心がどんなものかは知っている。

足型をとりながら、人間の足は右と左とでは長さも幅もちがうことには、イヤというほど思い当たる。まして、足が変形している人の、いかに多いかに、びっくりしたという。

「その典型が、外反母指(親指の骨が外側に突き出でる)です。原因是靴ですわ。本来、足の形は地下足袋みたいに先が開いてますわね。それを、デ

ザイン優先で、先のとがった、きゅうくつな型へ押し込んで、おまけに、ハイヒールなんか、すべり台（ヒールの傾斜）にかけて、先へ先へと全体重を乗せていくんやから、足形がいがむのも当たり前なんです」

自分の足に合つてこそ、自分の靴だ。なのに、靴に足を合わせるために足が変形する、というのでは異常な逆現象だという。並みの商売人なら、それを基本に、注文生産に応じるところだが、寺前さんはちがう。

「マスコミで、自分の靴が手作り出来る、と報道されたら、最初は関東、その後は中部・近畿の各地から障害を持った人の問い合わせが殺到しましてね。電話が一日二回、パンクしてしまった。それほど、足の障害に悩んでいる人が多いことを知つて、改めて考えましたわ」

相談の電話があると、東京でも静岡でも、寺前さんは出かける。生まれてから靴をはいたことはない、といふ人もいる。そんな時ほど寺前さんはファイトを燃やす。

「僕が会うた一人は、既製の靴がはけないために、外出する時は、ビニールの袋で足首をぐるぐる巻きにしてました。僕の思いも、いっしょです。風呂敷で足を包み込む感覚がすべてなんやから」

まず足があつて、それを包む靴がある、という発想だ。

靴に足を合わせるのではなく、足に靴を合わせる。
チョットした逆発想から生まれた「魔法の靴」。

もちろん、風呂敷ならぬ皮袋で足を包んだとて、靴という体裁にはならない。大きさもデザインも、さまざまであつても、靴に変わりはないのだから。

事務所の日程表は、ピッシリ埋まっている。東京YMC、灘神戸生協文化センター、岡山朝日カルチャーセンター……。いずれも寺前さんの講座を待つていてる。

「商売の宣伝で行くんと違いまっせ。これだけは聞いといてよ。女人の七割から八割が、親指の付け根が痛い、小指のツメが変形した、と『症状』を訴えているのは、デザインだけの靴に原因があることをいいたいことと、靴というのは、自分の足のためにあることを知つて欲いためや、いうことを」

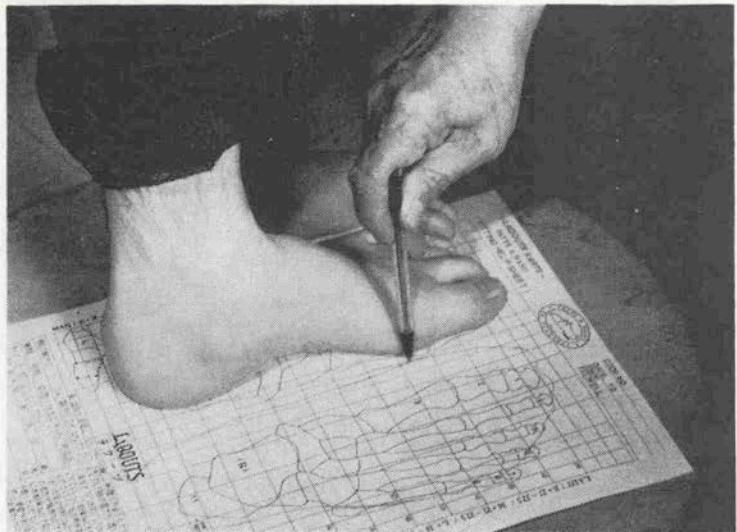
だけど、ふつう講座の時間設定は、二時間がいいところだ。時間内で一足つくり上げるのは難しい。それを、せめて三時間で編み上げるところまでプログラミングして、二時間以内に到達感を味あわせるよう工夫した。それが『大受け』を加速させている。

しかし、何ぶん本物の牛皮である。原価がどうなつて



最近、親指の骨が外側に突き出て、靴をはけば痛むといふ「外反母指」がふえている。デザイン優先の靴造りがもたらした典型的な弊病である。





皮の裁断は頭から尾の方向に沿って切りとられる。よりいっそうに
ぴったりと合う靴を作るための細やかな配慮がなされている。



「はき心地が靴の生命。うちには、ぜいたくに使う」と、
採算を考えれば後者を選びたいところだが寺前さんは



人それぞれに違う足のサイズ。また、同じ人でも
右足と左足では長さも幅も微妙に違う。足を包み
こむという視点から出来あがったラ・クーツはど
んな人の足にもジャストフィットする。

いるのかは知らないが、消費者感覚からすれば、さほど
安くないという思い込みもある。それでいて、キットが

女性用八千五百円、男性用が八千八百円。

「もうからんついでに、も一つだけいうとくわ。皮は
生きものや、ということは知つとてやろ。皮も呼吸し
とるんやから。それとなあ、牛一頭の丸革でも、トリミ
ング（切りとり方）があるんですね」

牛の頭から尾の方向に沿って皮を切りとると、皮は左
右に伸びる。だから、靴にしたとき、窮屈さを緩和させ
る。それを、背中と腹とのタテの方向でとれば、無駄を
少なくとれるが、靴としては左右の弾力がなく、足をし
めつけるだけだ。

方針を曲げない。

そうした職人気質が若い人たちには理解されないせいが、情熱的に仕込んだ職人さんが次々と辞めて行つて、今では三人になった。最も気になるところだが

「ようけ、礼状をもろてますねん」

いさか見当違いな答えが返ってきた。目の前に積まれたハガキ、手紙は、ざつと二百通だが、靴による苦痛から解放された喜びの声は十倍を越すという。玉津のリハビリテーションセンターに拠点を置く脳卒中友の会の機関紙などで、寺前さんのことが紹介されている。いずれも、ボランティア扱いである。

「この反響が、ものすごく嬉しいなあ。せやけど、僕一代で、この仕事はしまいや、あと繼いでくれる人がおらん。そない思うたら……」

寺前さんは、そこで言葉を切つた。どこかでフツ切れ

ている。善人ゆえに商売と結びつけることをためらい、さりとて商売人として、これを、どう継続発展させのか、悩んでいるはずなのに。

あるいは、そうした反響に支えられて、揺らぐことのない自信がついたせいなのか。

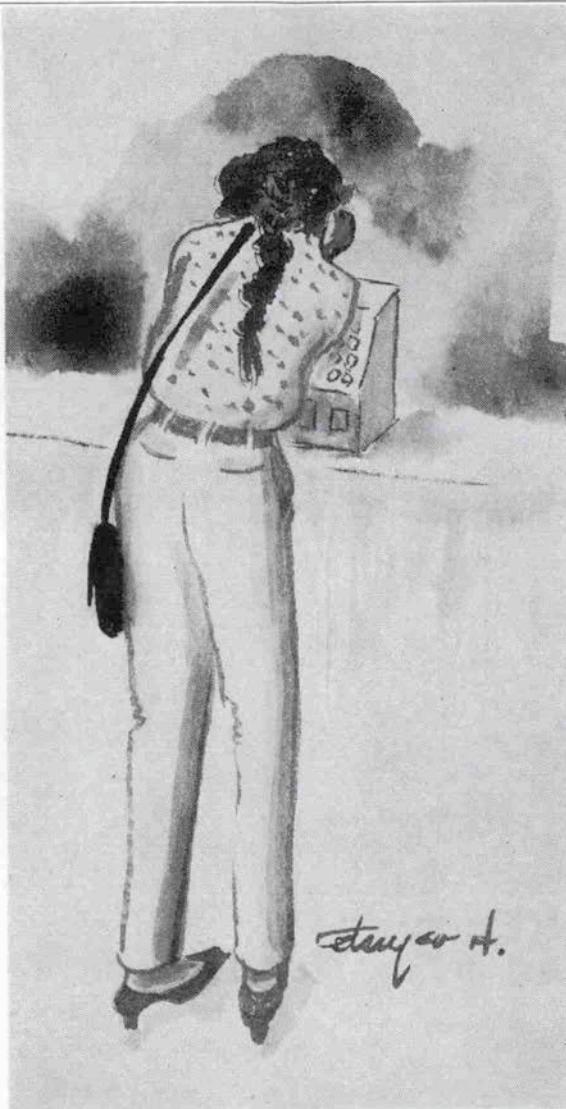
「キットに入れる足型にしても、ふつうなら（アルミや樹脂なら）高くつくんですが、メーカーに頼んで硬質発泡スチロールで作ってもらたら、ものすごくコストを下げることが出来ましてねえ」

つまり、やる気なのだ。高級なオーダーメイドとは全くちがつて、足の健康を守るカジュアル・グッズとしての“ラ・クーツ”を、生み出した誇りが、いま、この人もっとPRしてくれればいいのに。



「足の障害に悩んでいる人がいかに多いか。デザイン優先の靴づくりに対する意識革命が必要です」と熱い口調で語る寺前さん。

夏の遠景



△第2回▽

伊々田 桃

絵／羽多悦子 △題字も▽

その夕方、依子はG町へ行つた。

「帰りのバスは七時で終わるんやで、今頃から行かんで
も、明日にすれば」

出際に出でて玄関まで追いかけてきた母の目は、哀願で潤んで
さえた。

「高校の友達に会うのよ」

最もそうな嘘が、するする言えた。

「陽がかけつて出かけるなんて、誰が見てどんなふうに
誤解するかわからんやろう」

「相変わらず、世間体を気にしてるのね、私だったら何
を言われても平気なんだけど」

淡淡とした返答に、母の顔が苦痛に歪む。こんなやりとり事態もだが、母の泣き面を見るのは、ひどく煩わしかった。運良くと言おうか、奥の間から父の声がした。

「ほら、お父さんが呼んでるよ」

唇に笑いがこぼれたこと、

「おまえのやうな子は……」

という母の声は涙にまじり、いかにも辛そうに軀をこごめて引き返して行った。

バスはG町の駅前に停車した。

依子の足は駅の待合室へ急いだ。ジーパンのポケットから十円玉を掘み出し、赤電話へ投入する。

事務員らしい女の声が聞こえると、依子は名を偽つて達男を呼び出してもらった。

G町を南北に分けて、吉野川が流れる。依子は、大川橋の欄干に肘をつき、その川の流れを見下ろしていた。水流から吹く風が心地よい。時間を忘れそうになって、腕時計を見た。

この場所から数分下ったところの喫茶店で、達男と会う約束をしていた。まもなく、その時間になる。顔を上げて、喫茶店のあるほうを見やつたが、また虚ろに目を川へ戻した。

父の病院から去った直後に、依子は劇団を持つ男と暮らし始めた。経営は不振で、依子が働いて得た給料も劇団の費用に持つていかれるので、生活はいつも困窮していた。しかし、焦つたり諦めたり愚痴をこぼすこともなく、ただひたすらに脚本を書き、演技指導に悩む男の姿に、依子は充足していた。

「辛抱も、あと少しでおしまいさ」

そんな言葉が珍しく男の口からもれた矢先だった。思ひがけなく依子は急性の胃潰瘍で入院した。見舞いに来ない男を恨めしく思うことはあっても、男を感じていた。

ところが自宅療養にアパートへ戻つてみると、男の所持品は何ひとつ残されていなかつた。どこにそんなお金があつたのか、高級マンションで他の女と同棲していた。ひとりで出歩けるようになると、依子はそのマンションを訪ねた。ビキニの水着をつけた十七、八の女の子が、息を弾ませて応対に出た。モデルタレントとして、テレビにも出演していると耳にしていたが、依子を讶しげに眺める瞳に、未熟な硬さが残る軀には似合わない、生活の垢から生まれたような卑しいものがくずぶつっていた。

「あんた誰？」

「あなたに用事があつて来たんじやないわ」

女の子はふんと鼻をならして奥へ引っ込み、しばらくしてスローブに身を包んだ男の胸に腕をまわしてやつてきた。

「先生の知り合い」

先生と呼ばれた男は、依子を見て眉をひそめたまま黙つている。

「まさか、この野暮つたい人ともてきてたんじやないでよう」

今度は男の首に腕を巻き付け、「どうだつていいけどさあ」

男の頬に唇を押しあてた。赤いキスマークができるのを指で突つき、女の子は下品な高笑いをあげた。その笑いはなかなか止まらなく、はつとした時には、首に回された女の子の腕を依子は爪で引っ搔いていた。

男から飛びのいた女の子の腕の一点に、みるみる朱い半球が盛り上がった。その鮮やかさに錯乱し、依子は女の子の軀につかみかかるうとした。

「やめろ。この子はおまえと違つて高いんだぞ」

男が女の子の前に立ち塞がつた。

マンションを飛び出した後、どこをどのように走つたのか、依子は覚えていなかつた。足の幅よりわざかに広い溝へ、足を踏みはずし、堀へ寄り掛かつたときになつて、自分のアパートの数メートル先まで帰つてきていることに気がついていたのだ。

その晩、元気か、と母から電話があつた。ふがいなくも、涙がこぼれそうになつた。電話が切れた後もその場から離れず、親子なのだから、という言葉を飴玉のように舌先で嘗め回していた。忘れていた故郷の景色が、昨日までいた場所のようになつて脳裏へ色濃く浮かび上がつてゐた。

クラクションが三度なり、振り向くと、△野田メリヤス▽と黒字で印刷されたページュ色の車が橋の上で停まり、達男が窓から首を出していた。

「乗つて」

助手席に座ると、車は鈍い音をあげ、走り出した。腕時計を見ると、時間通りだつた。

「ここにいること、すぐにわかったの」

「ヨッコちゃんは目つくもんなあ」

達男の声は弾んでいた。

車は対向車の少ない山裾の狭い道を縫つて行く。山肌が黒く陰り、集落から外れてぼちりぼちりと立つ民家の窓から、橙色の灯りがもれる。

名前の知らない川沿いに着いた。

開け放した窓へ、河原から涼しい風が舞い込む。風に誘われ車を降りた。達男が足早に追つてきた。

色白の顔に、紅をあしらつたような唇がある。紅いだけでも男としてはかなり目立つものを、彼の唇は赤ん坊が母親のおっぱいに吸いついたまま成長したような、上

下にめくれあがつた形をしている。

「じっと見るのん、やめてえなア。ヨッコちゃんて、むかしから、そうしてじろじろ見る癖はあつたけどなア」

達男は小石を拾い、軀をやや斜めに倒して川面へ石を放つた。石は三度しぶきをあげ、水の中へ吸い込まれた。それが聞きとうて、僕を呼び出したんやろ

「わかつてゐるなら、早く話してよ」

小さな時分から、依子のほうが横柄な物言いをする。

背ばかり高くて威厳のない風貌から、糸こんにやくと徒名までつけたことがあつた。従兄妹の間柄だが、伯父がよその女に産ませた子供で、血つながりはない。小学校の入学直前に引き取られてきた。

親戚が苦手な依子も、H町にあるこの家だけは一人で列車に乗り、泊まりがけで遊びに行つたものだ。無頓着な伯父の性格、この付近には珍しい洋風建ての家も楽しかつた。しかし、第一には、伯母にこつびどく嫌われ、親戚の枠組からぼつんと疎外された立場の達男に、依子の好奇心はそそられていた。

脅えを含んだ目で伯母の顔色を盗み見る達男は、狭い小屋の中で飼われた鶏のようにおどおどしていた。

彼が高校三年の夏、伯父が不慮の事故で亡くなつた。親父がおるから我慢できるんでア、と言つてはいた通り、葬儀の翌日、彼は家を飛び出していた。

「七年間も、どこで何をしていたの」

達男は、影絵のような辺りの景色へ見るともなく目線を流し、

「大阪、神戸、名古屋……ヨッコちゃんが東京の短大へ行つたと知って、東京で働いていたこともあつたでア」

「へえ、東京のどこ？」

「もう、あちこち」

笑つて膨らんだ彼の声が、穴があいたように萎んでいく。

一年に一度、こっそりとH町へ戻り、伯父の墓参りを

した後、村へも寄っていたと言う。ちょうど去年の夏、村を歩いているところを父と会ったらしかった。伯母には、会っていない。会いたくない、と憤々しげにきっぱり言つた。

河原一帯の広い範囲にわたり、地虫が低い響きをたてていた。まもなく、すっかり暮れはて、石も川も木も見分けがつかなくなりそうだった。

「帰らんと」

息を詰めた面持ちで、達男が依子を見つめた。

「G駅まで送つて、一緒に帰つて詮索されるのはうつとうしいから」

「バスがないでア」

「タクシーよ」

こともなげに言う依子に彼は押し黙り、前屈みで歩いて車へもどつた。走行する車の中で、依子が何を話しかけてみても、彼はすねたように唇をへし曲げていた。

G駅の手前で停車すると、達男は交通安全のお守り袋に手を伸ばした。慌ただしく動く指先が千円札を抜き取つた。

「タクシーダイアア」

依子の胸元へ突き出す。

依子は手品を見た時よりも驚き、それからこそばゆい笑いが口の中にあふれかえつた。

「妙なところへ、お金を探す趣味があるんやねえ」

「そんなことはどうでもええから」

真面目に睨み、手に千円札を強硬に押しつけた。

いつものように座卓を挟んで父と達男が向かい合う。そこへビールを運んできた和美が、慣れた足取りで達男の傍へ擦り寄り膝をつく。野菜サラダを盛った器を手に母が、居間の隅で新聞を広げている依子に、「あ、あんたも一緒に」と、遠慮がちに言う。他に誰も声をかける者はいなかつた。依子を仲間に入れることを拒んだ父の背が、他の三

人にも影響を及ぼし、依子の存在を無視したよう、彼らだけの日曜日として振る舞おうとしているのだ。

「この十一月にな、達ちゃんのお嫁さんにならはるひと」この食事が始まる一時間ぐらい前に、母は、和美を紹介した。きまり悪そくに細い目をしばたたく母の隣で、少女趣味的なリボン柄のエプロンをした和美は、下膨れの頬を幸福そうに紅潮させ、杓子定規な礼をしていた。

先日、達男は結婚の相手がいることなど、匂わせもしなかった。帰郷以来、一言も口をきかない父はもちろん、母も今朝まで隠していた。冷蔵庫が買い替えられ、電子レンジの購入された台所は、今では依子より和美の軀が慣れ親しんでいるのだろう。依子は惨めな不快さをかみしめていた。

「もうすぐ昼ごはんになるけど、おまえ、お腹すいとするやろ、先に食べたらええでア」母が、一人分お願い、と言うと、和美はすっかりわかつてゐるような動作で冷蔵庫の扉を開け、肉の包みを取り出した。

「よしてよ、私に氣を使うのは」

「別におまえに氣なんか。ステーキ用の肉だから、どうせ一人分ずつ焼かなくちゃいけないし、ねえ和美さん」

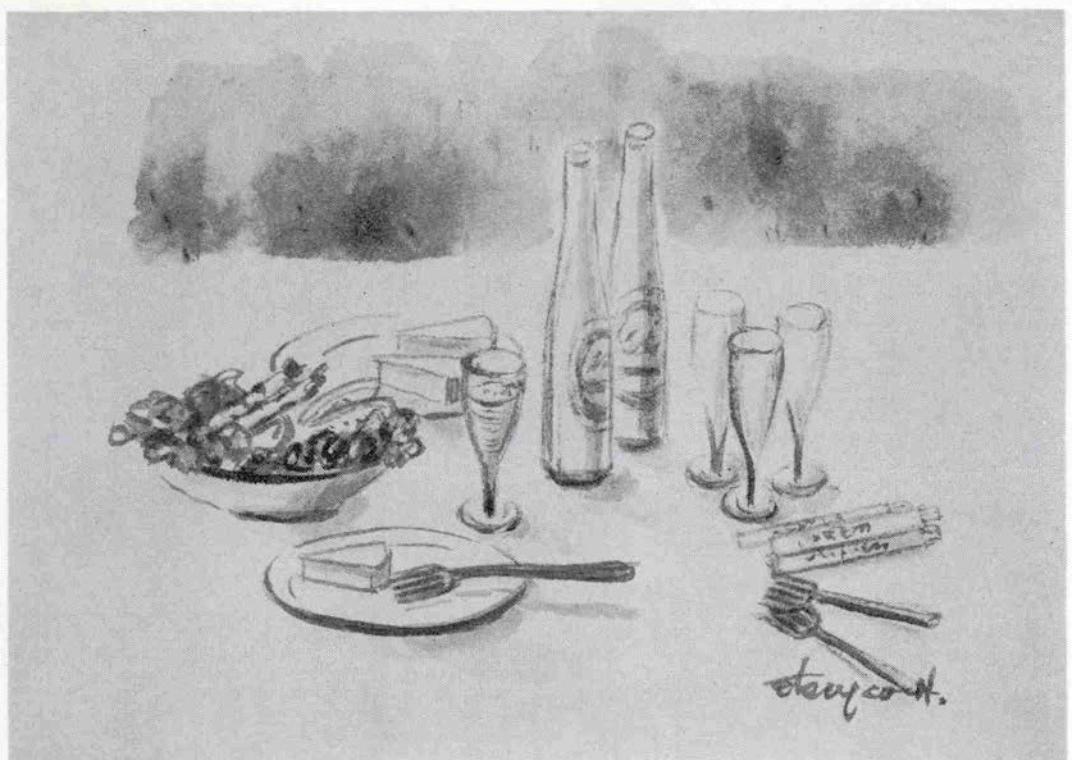
和美的手前があり、懸命に気張つて言う母は、その首に二本の青筋を浮かべていた。和美は包みを握つたまま、窮屈そうに肩を縮めて足元に目を落としていた。母が、先に食べたら、と言つたのには、この時すでに苦い星食風景を想定していたからなのだ。依子は、苦笑を浮かべて立ち上がつた。

あつ、と母が口走つて依子を見上げ、和美が見上げ、少し遅れて達男も振り返つた。しかしついでくれ、と言ふ父の一言で、皆がいっせいに父のほうへ向き直つた。一人だけ閉め出しがあった屈辱を、依子は廊下を歩きながら噛みしめていた。

部屋へ戻るなり、ベッドへ転を投げ出すと、依子は床に溜まつた泥を掬い上げようとして、長い長い息を吐

いた。四人がそれぞれに憎かった。しかし、一番嫌悪するのは、目に同情と困惑をちらつかせながら、父の機嫌をとっていた達男だ。

天井の雨染みに苛立たしい感情をぶつけている内に、ふと十年以上も前の出来事が、汚れた輪の上に重なり浮かんだ。



まだ中学生だった頃、台所の床へ、天井から蛆虫がぼとぼと落ちてきた。母が半ば目をつぶるようにして、新聞紙で床の蛆虫を取つて捨てた後、天井へ殺虫剤を振り掛けた。

「天井裏で、鼠か何かが死んでおるんじや」

父は、そう言つたが、自分から上つて行こうとしない。ちょうど、その時、伯母に連れられて達男が家に来ていた。上がつといで、と伯母が顎を突き出した。彼は、伯母の頬みには、首を横に振れない子供だった。天井裏では父の予想通り、大きな老鼠が死んでいた。死骸を新聞紙に包んで降りて来た彼は真っ青で、軟弱な軀は、今にも前につんのめりそうに見えた。

後始末を終えて戻ってきた彼の指先に目をやり、

「ああ、気色悪う」

伯母が身震いをした。

「おまんを前に夕飯を食べると、蛆虫が目に浮かんてくるでア」

彼だけ後回しにしたのだ。

縁側で膝を抱えて丸くなつた達男の姿態は、台所の蛆虫よりも醜悪だった。食卓をおどおどと窺い見る目は、泣いてもいないので、涙袋が赤く腫れ上がつていた。